

## 障害児教育における音楽療法導入の可能性と課題

木 村 敦 子

Possibility and Problems in Introduction of Music Therapy to Special Education

Atsuko Kimura

### 1. は じ め に

近年、障害児教育の場で、音楽療法の導入が試みられ、その事例も報告されるようになってきている。臨床音楽療法協会（2000年より日本音楽療法学会）に所属する音楽療法実践家に対するアンケート調査結果によると、音楽療法の対象は障害児・者が最も多く、全体の45.3%であった。さらに、その実施施設を見ると、自助グループが25.6%、通園施設21.6%と続き、学校現場（養護学校）は5.6%という割合になっている（村井 2001）。音楽療法の実施領域の1つとして、障害児教育の場が挙げられているが、実際の教育現場での実施は非常に少ないものとなっている。音楽療法士の資格が確立している欧米においても、「音楽療法を必要とする子どもたちは、教育の場に多く存在し、学校現場での音楽療法の導入が望まれる。」（Robertson, 2000）といった実態が見られ、同様に教育現場での実施はそれほど高い割合ではないことがうかがえる。

教育現場の実施が低い割合となっている要因の1つとして、カリキュラム上のどこで実施するのか、教師が行うのか、音楽療法士が行うのかといった、障害児教育における音楽療法の位置づけの問題が挙げられる。現在の学校現場における音楽療法は、主として、各教科「音楽」の授業、あるいは「自立活動」の指導に行われている（上野 1998, 藤原 2002）。音楽科の授業が音楽療法となりうるかどうかについては、議論が分かれ、実際に実施している教師あるいは音楽療法士も、それぞれの領域が明確になっていないのが現実である。音楽療法と音楽教育については、音楽活動を行うこと、それによって子どもの表現を引き出すことが共通点として挙げられる。そのため、「音楽教育と音楽療法は補完しあうもの」（Bunt, 1996）となるのである。しかし、Boxhill（1985）は、「互いに重なり合う面はあるが、目標の性質にその違いがある。音楽教育の目標は、音楽技能の習得であり、音楽療法の目標は、音楽の諸様式を通して生活技能を獲得することである。」と、それぞれの目標の違いについて述べている。同様に Bruscia（1998）も、「音楽教育においては、音楽学習が究極の目的であり、音楽療法における目標はまず健康に関するもの」とし、音楽療法と音楽教育の目標の違いを明確にすることが必要とされている。

学校教育の場で音楽活動が行われている「音楽科」と「自立活動」の目標について比較をすると、確かに、音楽教育において音楽療法的に活動を展開することも可能であるが、音楽科の一次的な目標は、あくまでも「音楽についての興味や関心を持ち、その美しさや楽しさを味わう」ことであり、音楽活動そのものに目標が置かれている。一方、「自立活動」においては、「心身の調和的発達」が目標に置かれ、療法的な内容をもつものとなっている。そこで、本稿では、盲・聾学校及び養護学校学習指導要領の「自立活動」の目標・内容と音楽療法の目標・

内容を関連させることによって、障害児教育、中でも知的障害児教育に音楽療法が導入できる可能性について検討を行っていく。

## 2. 「自立活動」の目標、内容と音楽療法

アメリカ合衆国では、1975年に「アメリカ全障害児教育法」が制定された。その中では、特別なニーズのある子どもたちのための公教育が special education と related services から成るものと規定され、教育以外の医療、心理療法などの専門的なサービスの1つとして音楽療法も位置づけられることが可能となった。一方、我が国では、2003年3月に文部科学省の「特別支援教育の在り方に関する調査協力者会議」から「今後の特別支援教育の在り方について」の最終報告が出され、障害児教育の今後の方向性が示された。その基本的な考え方として「障害に起因して生じる種々の困難の改善・克服するために適切な教育及び指導」の重要性、すなわち、「自立活動の指導」の重要性について述べられている。そして、質の高い教育的対応を支える人材として、「作業療法士、理学療法士、言語聴覚士等の専門家が指導に参画」することとし、アメリカ全障害児教育法に規定された related services に該当する内容について触れられている。「指導に参画する専門家」として、学校現場に音楽療法士が関わっていく可能性を見出すことができる。

「自立活動」は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基本盤を培う。」ことを目標とし、「健康の保持」「心理的な安定」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の内容について指導を行うこととなっている。音楽療法が「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」（日本音楽療法学会）と定義されていることから、次の「自立活動」の指導内容について音楽療法の実施が可能であると考えられる。（番号は学習指導要領に示された「自立活動」の内容に付けられているもの）

### 健康の保持

- (4) 健康状態の維持・改善に関すること。

### 心理的な安定

- (1) 情緒の安定に関すること。
- (2) 対人関係の形成の基礎に関すること。
- (3) 状況の変化への適切な対応に関すること。
- (4) 障害に基づく種々の困難を改善・克服する意欲の向上に関すること。

### 環境の把握

- (1) 保有する感覚の活用に関すること。
- (3) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。
- (4) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。

### 身体の動き

- (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。
- (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。
- (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。
- (4) 身体の移動能力に関すること。
- (5) 作業の円滑な遂行に関すること。

#### コミュニケーション

- (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。
- (2) 言語の受容と表出に関すること。
- (3) 言語の形成と活用に関すること。
- (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。
- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。

また、「自立活動」の指導計画の作成と内容の取扱いについては、「個々の児童又は生徒の障害の状態や発達段階等の的確な把握に基づき、指導の目標及び指導内容を明確にし、個別の指導計画を作成するものとする。」ことが明示されている。この個別の指導計画の作成によって、アセスメント、プログラム、実施、評価といった音楽療法のプロセスと構造を「自立活動」の中に位置づけていくことができると考えられる。

### 3. 「自立活動」の内容と音楽活動

#### (1) 音楽活動に含まれる課題内容

音楽の治療的機能としては、知的過程を通らずに直接情動に働きかける、自己愛的満足感をもたらす、発散の体験を提供する、美的感覚を満足させるなどが挙げられている(松井 1980)。これらの機能を有するがゆえに、音楽活動は、どのようなレベル、あるいは表現の様相にも合わせていくことが可能となり、そのことが、活動にはいるための抵抗を軽減し、主体的な表現を引き出しやすくしていく。「自立活動」の指導にあたっては、児童、生徒の主体性、成就感を味わうことができる内容、意欲的な活動を促す方法が重視されていることから、音楽を活用することによる効果が期待される。そのためには、「自立活動」の内容に対して、具体的な音楽活動の内容がどのように関わっていくことができるのか、療法的視点から音楽活動の要素を見ていく必要がある。

そこで、Levinら(1975, 1977)による音楽活動プログラムに示された療法的内容を援用し、「自立活動」の内容と関連させて見ていくこととする。

Levinらは、音楽療法のプログラム、あるいは特別なニーズのある子どもたちの教育プログラムとして、“Learning Through Music”(1975)および“Learning Through Songs”(1977)を作成している。これらのプログラムは、音楽が基本的な技能や概念を身につけるための効果的なメディアとなりうる、という考えの基に作成されている。“Learning Through Music”のプログラムは、楽器による活動と歌による活動から成っている。その活動は42の基本的なActivityと100以上のVariationがあり、それぞれのActivityには、知覚—運動発達、注意、言語発達、関係概念・数概念形成の5領域に関する達成課題が示されている。また、“Learning Through Songs”のプログラムは、16の基本的なActivityから成り、認知面と感情面の領域に関する課題が示されている。「自立活動」の内容に対して音楽活動を設定する際に、これらの課題内容と照合することにより、音楽活動で何を達成することができるのかということが明確になると考えられる。

そこで、Levinのプログラムに設定された課題の内容<sup>注1)</sup>と、前項に揚げた「自立活動」の内容を対応させ、活動の目標の明確化を図った。(表1および表2)

表1. “Learning Through Music” 課題内容と自立活動

“Learning Through Music” の課題内容		自立活動					
		健康の保持	心理的な安定	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション	
数概念		加法の初歩			○		
		集合			○		
		ゼロ			○		
	計数		4 - 10 の数			○	
			1 - 3 の数			○	
			1 対 1 対応			○	
		機械的に数える			○		
	1 と 1 以上			○			
関係概念		1 番目, 2 番目, 最後			○		
		以前 - 以後			○		
		高い音 - 低い音			○		
		長い - 短い			○		
		大きい音 - 小さい音			○		
		前 - 後ろ			○	○	
		上 - 下			○	○	
		右 - 左			○	○	
	止まる - 動く			○	○		
言語発達		読み以前の技能				○	
	文法的な構造	分類					
		仮定					
		これは - あれは					
		単数 - 複数					
		文				○	
	語彙				○		
	語音の発声				○		
知覚 - 運動の調和		聴覚 - 運動の調和			○		
	視覚 - 運動の調和	目 - 手の課題			○		
		手 - 目の課題			○		
		腕 - 手の課題			○		
知覚 - 運動発達	知覚の発達	聴覚記憶と配列			○		
		聴覚による弁別		○	○		
		視覚記憶			○		
	運動発達		ボディイメージ			○	
			正中線交差			○	
			方向			○	
		ラテラル テーター	左右の協応			○	
			交互打ち			○	
			体位の移動			○	
			呼吸と目のコントロール	○		○	
			微細運動			○	
			手首の動き			○	
			肘 - 前腕の動き			○	
			腕全体の動き			○	
			音の強弱への反応		○	○	○
			敏速な反応		○	○	○
			連続した反応		○	○	○
			単純な反応		○	○	○

表2. “Learning Through Songs” 課題内容と自立活動

“Learning Through Songs” の課題内容			自立活動				
			健康の保持	心理的な安定	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
感情面	社会的認知	個人的な相違		○			
		他の人の間違い		○			
		友だち		○			
	自己概念	悲しいできごと		○			
		間違い		○			
		肯定的な自己概念		○			
		同一性		○			
認知面	言語	語頭音					○
		ことばあそび					○
		動詞の過去形					○
		韻					
		言葉の短縮					
		複数形					
		主語-述語の一致					
		代名詞					
		文の構築					○
	言葉の構築					○	
	分類	限定されたカテゴリー			○		
		大まかなカテゴリー			○		
	一般知識	五感			○		
		天気・気候			○		
		曜日			○		
年齢				○			

(2) 具体的な音楽活動と課題内容

Levin らによる“Learning Through Music” および“Learning Through Songs” に設定された音楽活動は、「自立活動」の内容を指導する上で非常に有用な教材である。その要因としては、1つ1つの音楽が短く、複雑になっていないこと、繰り返しのあること、さらに、ひとり一人の表現に合わせて、即興的に変化させることが可能である点が挙げられる。これらの点は、音楽療法で使用される音楽、特に子どもの領域で使用される音楽に求められることである。このように、音楽療法で使用されている音楽活動について、それぞれの活動に含まれる課題内容が明確に示されているならば、「自立活動」内容の何を指導するのか、目標が明確になってくると思われる。そこで、“Learning Through Music” あるいは“Learning Through Songs” 以外の音楽療法で使用されている教材曲について、それぞれに設定されている音楽活動を課題内容との関連から分析した。分析に使用した曲は、P. Nordoff C. Robbins による「子どものためのプレイソング」(全17曲)<sup>1)2)</sup>(表3, 表4), および生野里花・二俣泉編「音楽療法のためのオリジナル曲集—静かな森の大きな木」より自立活動の内容に関わる活動の設定できる12曲<sup>1)3)</sup>(表5, 表6)を選択した。

表3. “子どものためのプレイソング”教材と“Learning Through Songs”の課題内容

“Learning Through Music”の課題内容		“子どものためのプレイソング”																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
数概念		加法の初歩																	
		集合																	
		ゼロ																	
	意味ある計算	4 - 10の数																	
		1 - 3の数																	
		1対1対応																	
		機械的に数える																	
	1と1以上																		
関係概念	1番目, 2番目, 最後																		
	以前 - 以後																		
	高い音 - 低い音																		
	長い - 短い																		
	大きい音 - 小さい音																		
	前 - 後ろ																		
	上 - 下																		
	右 - 左																		
言語発達	読み以前の技能																		
		分類																	
	文法的な構造	仮定																	
		これは - あれは																	
		単数 - 複数																	
	文																		
	語彙																		
	語音の発声																		
知覚 - 運動の調和	聴覚 - 運動の調和																		
	視覚 - 運動の調和	目 - 手の課題																	
		手 - 目の課題																	
		腕 - 手の課題																	
知覚 - 運動発達	知覚の発達	聴覚記憶と配列																	
		聴覚による弁別																	
		視覚記憶																	
	運動発達	ボディイメージ																	
		正中線交差																	
		方向																	
		ラテラル ティー	左右の協応																
			交互打ち																

障害児教育における音楽療法導人の可能性と課題

	体位の移動																			
	呼吸と口のコントロール		●			●														
	微細運動																			
	手首の動き									●									●	
	肘-前腕の動き									●									●	
	腕全体の動き									●									●	
	音の強弱への反応									●									●	
	敏速な反応																			
	連続した反応																		●	
	単純な反応									●										

表4. “子どものためのプレイソング”教材と“Learning Through Songs”の課題内容

“Learning Through Songs”の課題内容		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17		
感情面	社会的 認知	個人的な相違														●				
		他の人の間違い																		
		友だち								●		●		●		●				●
	自己 概念	悲しいできごと									●									
		間違い																		
		肯定的な自己概念															●			
	同一性								●				●							
認知面	言語	語頭音	●	●	●		●		●		●	●	●		●				●	●
		ことばあそび					●													
		動詞の過去形																		
		韻																		
		言葉の短縮																		
		複数形																		
		主語-述語の一致																		
		代名詞																		
		文の構築																		
	語彙の構築	●	●	●	●	●								●	●	●				
	分類	限定されたカテゴリー					●													
		大まかなカテゴリー													●					
	一般 知識	五感																		
		天気・気候			●											●				
曜日					●							●								
年齢																				

表5. “静かな森と大きな木”教材と“Learning Through Songs”の課題内容

“Learning Through Music”の課題内容		“静かな森と大きな木”												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
数概念	加法の初歩													
	集合													
	ゼロ													
	意味ある計算	4-10の数												
		1-3の数				●	●		●					
		1対1対応												
	機械的に数える				●	●								
1と1以上														
関係概念	1番目, 2番目, 最後			●		●								
	以前-以後													
	高い音-低い音		●	●				●						
	長い-短い	●	●											
	大きい音-小さい音	●	●		●	●					●	●		
	前-後ろ													
	上-下													
	右-左													
止まる-動く						●						●		
言語発達	読み以前の技能													
	分類													
	文法的な構造	仮定												
		これは-あれは												
		単数-複数												
	文													
	語彙													
語音の発声	●	●								●				
知覚-運動の調和	聴覚-運動の調和												●	
	視覚-運動の調和	目-手の課題			●			●	●	●		●	●	
		手-目の課題								●				
		腕-手の課題												
知覚-運動発達	知覚の発達	聴覚記憶と配列				●	●							
		聴覚による弁別	●	●	●			●	●	●		●	●	
		視覚記憶												
	運動発達	ボディーイメージ												●
		正中線交差												
		方向												
		ラテラルティー	左右の協応				●							
			交互打ち				●							



#### 4. 考 察

障害をもつ人に対する音楽療法のアプローチの新しい概念として、transdisciplinary ということが言われている (Boxhill 1985)。これは、個々人の問題への対処に、関連した各分野が協働していくということである。Boxhill は、障害児教育の分野を transdisciplinary アプローチとしての一つとして位置づけ、音楽を使うことによって強化され、刺激される能力として、「聴覚能力と聴覚識別能力」「記憶、想起、保持」「色や事物に対する認識」「知的プロセスの刺激を通しての理解力」を挙げている。これらは、「自立活動」の内容に示されている、「状況の変化への適切な対応」、「感覚の活用」、「概念形成」といった内容につながるものである。本稿では、これらの強化され刺激される能力を、課題内容として、音楽活動の中に具体的に設定される可能性について見てきた。ここでは、これらの課題内容と「自立活動」の内容について考察をする。

「自立活動」の内容は、「健康の保持」、「心理的な安定」、「環境の把握」、「身体の動き」、「コミュニケーション」の5つである。これらと音楽療法場面で使用されている教材による音楽活動に含まれる課題内容を照らしてみると、表3、4および表5、6に示されるように「環境の把握」、「身体の動き」、「コミュニケーション」の基礎としての言語に関することが多く含まれていることが分かる。心理的な安定の内容に対して音楽を活用することは非常に有効であるが、課題内容には、適応するものが少ない。稲田 (2003) は、「音を媒体とした非言語的なかかわりを開始することができれば、クライアントは孤立感や欲求不満から少しずつ解き放たれていく。」とし、そのための即興による音楽的対話を重視している。岡崎 (2004) も「音楽という媒体が介入すれば感情を表現する手段がスムーズになり、感情の両極性を体験しながらその中庸をコントロールする力が生まれてくる。」とし、子どもの感情に寄り添うことのできる即興による音楽の治療的役割について論じている。音楽療法では、音楽を個々の対象者に合わせて音楽活動を設定し、即興的に音楽を展開していく。このことが、個々の状態に合った発散の方法を提供したり、個々の表現に応じて達成感をもたらしたり、満足感につながったりするのである。心理的な安定のために音楽を活用するというよりは、活動に含まれる課題内容というよりは、それぞれの課題を解決するための活動として、どのような音楽をどのように展開していくのか、という音楽の選択と展開方法に関わるものであると考えられる。

Levin は、“Learning Through Music” “Learning Through Songs” の活動プログラムは、音楽的なトレーニングをあまり受けていない教師でも実施が可能である、としている (Levin 1975)。しかし、それぞれの activity の展開は、子どもの動きに合わせること、子どもの表現に応じて音楽を変化させることなど、上述したような音楽療法における技能を要求されている。療法的な目的を達成するためには、即興的に音楽を展開できる、音楽的なトレーニングを受けた教師あるいは音楽療法上による実施が望まれる。

学校現場で音楽療法を実施してゆくためには、さらに解決しなければならない問題がある。まず、実施にあたって、学校内でのコンセンサスが得にくいことである。これは、「音楽療法」という概念が、学校現場で十分に理解されていないことに因ると思われる。このことに関しては、個別の指導計画の中で、一人ひとりの子どもたちの解決すべき課題に対する音楽の機能と、期待される効果について明らかに示していくことで理解を図っていくことが考えられる。また、音楽教育と音楽療法の目的の違いといったことを明確に示していくことで、関わる教師間で共通認識をもつようにすることも可能となってくるとと思われる。さらに、「自立活動」と「音楽科授業」との関連を図り、音楽科授業の中で療法の目的をもった活動を取り入れることにより、

補完的な効果をねらっていくことも必要である。

注

注1) Teaching Resources より出版された“Learning Through Music”(1975) “Learning Through Songs”(1977)の初版にある課題内容の一覧である。Barcelona Publishers より各1998年1997年に出版された第2版では一覧は割愛されている。

注2) 表中の番号は、曲集に示された各曲の番号である。

注3) 表中の番号は、次の曲を示す。

- 1 吉井あずさ 作詞・作曲「大きくア」
- 2 生野 里花 作詞・作曲「高い声, 低い声」
- 3 吉村奈保子 作詞・作曲「順番にならそう」
- 4 生野 里花 作詞・作曲「よく聞いてたたこう」
- 5 白井裕美子 作詞・作曲「2人の音」
- 6 二俣 泉 作詞・作曲「チャイムをならそう」
- 7 中馬 千晶 作詞・作曲「ふたつの音」
- 8 小柳 玲子 作詞・作曲「一緒に鳴らそうよ」
- 9 小柳 玲子 作詞・作曲「らっばづぎ」
- 10 薫ロビンズ 作詞・作曲「そっと」
- 11 千川 友子 作詞・作曲「静かな音」
- 12 水野 明子・生野 里花 作詞・作曲「静かな森の大きな木」

文 献

- 村井靖児 (2001) 音楽療法の臨床的効果に関する研究—実践家に対するアンケートの分析から— 厚生科学研究費補助金障害保健福祉総合研究事業平成12年度研究報告書
- Robertson, J. (2000) An Education Model for Music Therapy: the Case for a Continuum, *British Journal of Music Therapy* vol.14(1)
- 土野研治 (1998) 職業としての音楽療法—養護学校からの報告— 音楽療法研究 vol.3
- 藤原志帆 (2002) 養護学校における音楽療法の視点を導入した実践に関する考察—日本音楽療法学会第2回学術大会発表論文
- Boxhill, E.H. (1985) *Music Therapy For The Developmentally Disabled*, PRO-ED, Inc. (林庸二, 稲田雅美訳 発達障害児のための音楽療法—人間と歴史社—2003)
- Bruscia, K. E. (1998) *Defining Music Therapy*, Barcelona Publishers (生野里花訳—音楽療法を定義する—東海大学出版会—2001)
- Bunt, L. (1994) *Music Therapy An art beyond words*, Routledge (稲田雅美訳—音楽療法—ミネルヴァ書房—1996)
- 盲・聾学校及び養護学校学習指導要領—文部省(文部省告示第61号)—1999
- 松井紀和 (1980) 音楽療法の手引き—牧野出版
- Levin, G.M., Levin, H.D., Safer, N.D., (1975) *Leaning Through Music*, Teaching Resources Co.
- Levin, G.M., Levin, H.D., Safer, N.D., (1977) *Leaning Through Songs*, Teaching Resources Co.
- P. ノードフ, C. ロビンズ, 日本ノードフ=ロビンズ音楽療法士の会—創造的音楽療法曲集—子どものためのプレイソング—音楽之友社—1999
- 生野里花, 二俣泉 編集—音楽療法のためのオリジナル曲集—静かな森の大きな木—春秋社—2001
- 稲田雅美 (2003) ミュージックセラピー—対話のエチュード—ミネルヴァ書房
- 岡崎香奈 (2004) 児童領域における音楽療法, 飯森眞喜雄—阪上正巳編—芸術療法実践講座4—音楽療法—岩崎学術出版社

—平成16年10月8日 受理—